南洋方面に於ける原動の勢力は、蘭領印度であつて、こゝでは全南方面にも通用してゐる。蘭印には百二十萬の華僑がゐる。矢張り蘭領東印が一番多く、次に、英領、佛領、その他の順となつてゐる。

その分布は、爪哇マヂラ、スマトラ、ボルネオ、セレベス、バリ・ロンボク、セルフケン、ケルとなつてゐ、爪哇マヂラは五十八萬二千人、スマトラは四十四萬八千人で、蘭領印と共いてゐる。（一九三〇年調査）

その職業は、商業、農業、工業、交通、自由職業、官公吏等の順である。商業は雜貨小賣商、行商人が多く、官吏商は少ない。

農業方面でも非常に多く、地方に散つては木材業、漁業、鉱夫が入込んでゐる。

工業方面について官別芳郎氏は「南洋産業の經濟的基礎」（前掲「南洋研究叢書」）の中で、次の通りに報告してゐる。

「工業方面へも全華僑者として活躍して居り、蘭領印に於ては華僑所有は殆ど十年前に四〇を數へたが、一九二二年には一四となり、更に世界的經濟恐慌によつて著しい打撃を蒙り、今は僅かに五、六を殘すに過ぎない。但し蘭米工場、ヤヤッサバ工場、ケチャップ工場、コプラ製造工場等には優勢なる地位を占め、茶、煙草、石油、鉄工、石鹸、製氷、製材、製米、印

刷等の小工場、又手工業として藤細工（バンゲン藤材細工）、陶器、大工、家具、靴、金細工、織物、鍛工、自轉車修理等の多なる方面に活躍してゐることは著しい特徴である。之といふのも爪哇は人口稠密で、勞賃が低廉であることから、歐人の大資本なる金融の下に在つて、中小企業の下に在つて、中小企業者として、家内工業や手工業方面に華僑が地位を獲得し、土著民に對して原料や金融を貸與して其の勞働力を搾取と搾きつけてゐる。爪哇製糖の如きバチック工業に於て經營工場數は爪哇の合計で、土著人三、五一五、華僑七二七、アラブ一三〇、歐人一二（一九三一年）で、土著人より少ないが、歐人者の家内で行はれるものに對して、原料の貸付が全貸の形式で行はれてゐることの多いので、華僑の勞力は上述以上である——」

フィリップピンで、華僑が通商に活躍したのはスペイン領有當時の夢となり、米領の今日では入國禁止の爲め非常に少ない。今はせい〳〵十一萬内外である。

こゝの華僑は、福建が八割を占め、廣東はやつと二割だが、南支人に限られてゐるところに、特異性がある。

フィリップピンの華僑は、植民地半封建本來の特質を充分に發揮して、歐米資本家と土著民の間に物資の仲介者として存在し、前者に深い結合を持つと同時に、後者から利益を上げてゐる。

その職業は、商業、高利貸、雜貨、米の買付取引、生産業（米、麻、煙草、木材、椰子、砂糖

コプラ、麻、その他の農作物）等である。尖に関する仕事、貿易は、殆んど日本人たつてゐる。

他し、フイリピン土着人は、固立にそなへて、一九三四年より全国民族協議会（Nasion Pronunciamiento Ang ciudad）即ち NSPA を組織し、島内諸族の生命からの解放を闘つてゐる。これは、一国民内内であるが、それには民族解放の意味が十分にある。

こゝにも、植民の歴史と、対象の問題が見られる。南洋一帯の民族は、その民族意識に強く、他が民族の南洋を、所謂する為め、ルチャ的解放運動を展開するであらう。又、この問題と関して、白人に対するであらう。その問題が、最近のフイリピンである。

五　南洋諸島

ところが、之部には支部で「南洋諸島問題」がある。他等の為め、次に一文を掲載して見る。それは即ち「南洋」に関つた政治的の「南洋諸島問題」である。曰く、

南洋といふ名称は、大凡国内の如き南洋に関連づけられてゐる事実であるが、これは蓋そこが南洋の中心であるからであるし、同も且つこの名称が全国に通用してゐるといふ理由があるからである。是上に明以前には太平洋西洋があつたばかりで、南洋といふ名はなかつた。

昭和の「南洋諸洋」第五の「文献篇」に「文献は即ち南洋諸島にして、東洋の呼ぶところ、南洋

の自ら起るところなり」と云つてゐる。

此れに依つても、現在所謂南洋なるものは、歴史上即ち明代の東洋と西洋の一部分であつた事が知られるのである。その当時の東洋といふのは日本三島と琉球諸島までを指していひ、そして西洋とはマカワ海峡の西をいふのである。今日の南洋の範囲を、之を概略していへば、即ち佛領印度支那半島、シャム（タイ）、英領印度支那、蘭領東印度支那、ボルネオ、フイリツピン群島等々での地である。その面積は百七十万平方里で、約我が国の三分の一倍を占め、人口は一億くらゐで、約我国の四分の一倍を占める。地域は熱帯で、低緯は温和、その海岸は四百メートル以下であるからして、農業に便利である。且つ文化も優れ、工業も発達してゐないので、外国の貨物を輸入してゐるのである。これとそれに人口稠密の国家の多い植民地であり、生産過剰の社会の好市場である。

かく説かれる通りであつて、他地の資源的条件は凡て我が移民に適合してゐるからして、我国は こゝにあつて悠久の歴史と豊富な資源を持つてゐるのである。

政治上にあつては、明の永楽年間、鄭和は曾て三佛斉の一部を占領して王と称し、鄭和は曾つて宝船の開日となつた。成化年間、鄭文侯は暹羅に仕へ、位「坤西王」以上に支那の軍士の如きものではあるまいか）に昇り、宣宗年間には、林道乾は暹羅の朝山の外事係となり、嘉靖年間に

は間（約間）巾の海峡を隔てて直接英に居る。開闢には英領英国は
貿易上に於て極めて重要な地位を占めつゝあつた。
（後子るに、開闢国は、一名暹羅といひ、水路を距ること十八哩のところに在つて、古代より国
勢に富まれしなかつた）

統治年間には、暹羅はシヤムに住宅し、仏蘭西に亜り、仏蘭西がシヤムに反抗するや、明はそ
れを支援し、民衆に推されて王となつた。その他暹羅の王族既氏の如き、寄支那の血統である
が、暹羅的、暹羅男、暹羅……の諸人も皆左世て一方の長であつて（くはしくは「南洋華僑抗民
傳人傳」を見よ）、官に奉職は前押のうちにあつて政治上の権威を握つてゐたのであつた。

経済上にあつては、「暹羅文獣勢」に「（米産）所付の村主は暹羅人にして、蓄船はこゝに亜りて
万市を成せば、金銭充溢す」と言つてゐる。英国の前総督シュアイキンは「昨年各国の今日ある
は、中華人の力を多しと為す。暹人の京都の初めには、多く中華人の財力に頼み、以て建設の平
治を得、大いに土木興り、行政の要はこゝに於て勝く」といつてゐる。

一九二二年、暹羅の政治局の統計によれば暹羅の華人の数は中華人が最も多しとなしてゐ（三
三三五人）、暹人は約ほとれにつぐ（二一五二人）、西洋者及アメリカ人は二三百人に過ぎぬの
みである。貿易上の実権の実上代金も華中華人が最も多大であつて、総計三億二千万元と推定し

てあるが、暹人は八千万元に過ぎなく、西洋者人及米人は僅かに四千万元に過ぎない。これにて
も華僑が暹羅に於て前押方面で経済を牛耳つてゐた事が見られるのである。

社会上にあつては、どうであるかといふに「暹羅外国事」に「暹羅にては中国の貿人にして西
洋者と、官位を以て優遇す」とあり、「南洋華僑抗民傳」にては「華僑と暹に結婚すると雖も、
尤も、暹人を最愛し……」といふ。これによつても、華僑が暹羅にあつて、南洋の社会上に官に
第一の高貴らしい地位を占めてゐた事が見られる。

かく政治される通りであつたから、華僑のこゝに於ける全般の地位と勢力は皆左右結目標に向上
す可きであるが、これに反し沒落に向ひ、時に暹人の敵視するのと同じ、失敗の原因者が敵視と
陰をつらぬて開闢するはどうした事であらうか？　その中の原因は多少や大いに仮説であつて、
確かな言葉では言ひつくせぬが、敢に見聞するところを以、開闢に暗誦すれば左の如くである。

（一）国家の自覚　此の侵略的武器内弱肉の世界にあつては、人民の自覚するところは国家の保
護と発展であるのは、まことに当然が最善と求めるのと一般である。但し内地に於て位置し、国
国を離れた事のない人々が、日々政府の恩恵を被り、開闢として死命の上にある問題を見たなら
ば、この様の環境の下にあつては、唯は只に国家と愛さなくなるかも知れぬのみならず、却て恨
むやうになるのである。然し大き大き機会を得て外国の領土に進出し、暹羅人の威風、典雅、中

個をはつきりさせ、自己開拓として反抗し、開拓と考えずに可きことと考えないならば、これは極る事開拓者がないのである。人民と開拓の開拓は世界に於て世界にあつて多方面で凡て低い生産能率を地位に置つてゐたが、今日では彼ら民族の開拓を殺り、種々の開拓を受け、個人はその生来の生命と時間する事が開拓中、開拓者もことごとくその技術と経験する事が出来ず、自己は唯だその労力を用ひることが出来ないので、何もかも只機械的に開拓と維持してゐるだけである。家族も家族水行者の生活では、自己事が開拓中して働くの外なく、かの者から保持してゐたものも彼女の生活となるのは家族である。開拓が進歩してゐる為め、これと保護し自己自身に任せる力が無く、自つての開拓は他人となり、外来は開拓し、世界シャムの移民の如く（紀元二十五年）他国各地の移民も、政府は見て見ないふりをしてゐるのである。これが世に開拓者の生活の主要原因である。

（二）　国内工業の発展　全国の開拓の世界へ出かけた開拓は、世界を除く外は、十人の八九まで迄は白人であつた。開拓後には多くからの農工分子が、生活の為めに移行されて已むを得ず他地に向つて開拓した。（前の開拓は世界に向ケ年間スマトラに開拓した、開拓者に対する人の基礎がある）次、明二代には、開拓開拓が、政治的開拓の為め已むを得ず、他地へ向つて開拓した。（後へられるところでは、開拓の開拓仲立、開拓者は凡世に戻り、明の統王は世界で開拓に亡命した）しかし失敗の開人が中心であつて、開も土人が獲得したところの者も亦開人だけだつたのである。

「開拓者」、開拓者開拓では「開拓者開拓は即ち開拓の支開なり……白貨を浮説し、宿泊飲食の費用し」といい、又同書の「開拓」の條「三仏斉記」「島夷志略文老古條」にも開人開拓の事が記してある。

それに由つて見られれば、世界の開拓の開拓に於ける地位は最大であつたのである。この他の開拓者は必ず開拓の開拓の三種であつた。これに依つても支那人が最全に於て開拓の土人の獲得を受け大の者が見られるのであるが、これは決して開拓が開拓者であつたからではなく、支那の貧弱の工業が比較的進歩してゐたからであつて、彼らに支那人の供給を求めたからである。蓋し人開拓にあつては、最も開拓開の開ひ使するところに、多大開工に開用する開があつて、始めて永久に開拓開始するものであるが、開し一方開ばかりが開発で他の一方開に依頼となるやうな状態は、久しからずして破滅となり、開開する今うになり、開発しい時は明日の開支は今日の敵と開るからである。

今迄開が開拓土人の信仰と安全心を失つたのは、開拓開開の工業が支開し、その開開品が、土人の開開を安全に見られなくなつたからである。だから、今迄開し開開の工業が長足の進歩をする

事が出来、別及な開墾と開拓の結果に過つたならば、即ち過去のあの放浪生活の心理が又再び復活されるのである。北国の女郎中の工場の設置し大国は、絶目が無くて呼ぶが如き騒ひで開拓に駆逐されてゐるが、我国はこの点に無考であるから、到る処で白人国民され、他序を失げてゐるのである。今の開拓の農場たち社会事業政引のしやうがないので「嘗して嘗へば大山も崩し」とかこつてゐるが、こんな事では日なる大義理するの一絶を絶つてゐるのである。

（三）　互助と協同精神の欠乏、明の高度技術（一五七五——一六一九）には、支那は開拓方面にあつて、能率の中に於て実に非志国の地位にゐたのである。それ以後白人の東漸拡充が日々に強しくなり、能率の発展政策と以て、開拓に植民主義を統行した為ので、我国の一貫した東漸政策は、こゝに至つて即ち失敗と分げ、之れに即り無数の地位も亦即ち第二位に甘廃して了つたのである。十九世紀の初頭に及ぶと、白人の開拓的勢力はやうやく全国となり、他国が侵略したので、こゝに於て即ち今々その勢力を消して無数に合つたのである。蓋し支那の開拓は未だ平原未開の地域であつたから、他国に侵略する為めには実に大金の資本者と勇敢したところへ、国家的利益一切は、日々に人口増加と合げて生活に苦んでゐたので、これら一般の農工らは即ち此の千載一遇の機会に乗じて相率ゐて開拓へ向つたのである。こゝに於て開拓移民は工を中心とするやうになつた。これは未曾の気的変化であると同時に、その全く未経験したのである。この

如く人数が甚だ多くなると、分子も複雑となり、之に因つて具現は不ぞろひとなり、善良な者は国よりよく開拓工作し、自らの生活を計つたが、愚劣な者は即ち怠惰の習性となり、己に仕事を嫌ふやうになつた。但し宮地にあつても、強も自分を知る者がなく非常に寂しいので、一時の生活の慰藉は、つひに酒を作り中を飲し法紀を干犯するやうになつて了つたのである。これは少数中の少数に過ぎと雖も、能し部衆中にかうした「害馬」のある事は、即ち仲間人に苦痛を感じるの心を起さしめた。又一般の移民にも見識が未だ厚くなく、頭脳には伝統的基礎が充満し、郷土観念が甚だ厚く、かの浙州衆、粤州衆、閩州衆、蘇州衆、湖州衆、鳳州衆のやうなものを作り、お互ひに境界を守り、分門別戸の状態で、古い癖、絶の態度を保たうとし、教育をよく消化、言葉をよく別し、慣習を事よく行ふといふやうな事に絶なく、凡て各自の帮（同郷の仲間）で計り、互ひに聯絡を取ちや、甚だしきは相互の攻撃であつて、時に目的に達しようと思ふと、つひに手段を選ばずして、宮地の政府の勢力を利用して他国の同胞を脅迫するのである。この種の利己主義の平方な観性は、実に外人の支那人を侮蔑する心理の主要な原因であつて、不幸な事件の甚だ多いのは、凡てこの種の心理から結成されたものである。これに依つても、移民が統理するのは相互扶助と協同精神の欠乏にある事を知る可きである。

（四）　知識の欠乏　白人種の開拓精神の根柢には、他国が厳大であつて、移民者の智識も多か

つたから、当時の資本力は、高利であつて大いに苦つた。が、しばらくすると、「番地」「商標」にことごとく登録され、官憲に保護され、賃銀は安く、この時には熟練工と成んじ、安人労働者の増加と進んじたが、しかもこの熟練の工作はどうしても組合を組織せねばならぬのに、当時の多くは支那内地の農夫出身者であつて、熟練現代の職工と故郷は何も関係ないのであつた。これがまつたく別世界の失業問題の莫大な原因である。又個人的家内工業の水呑みされた後、資本主義は商業資本より進んで工業資本となり、呼び寄んで金融資本となり、その勢力は不断に硬化し、その組織は日々に合理化に向つた。而も欧米資本主義に寄生する植民地の搾取は、力量は不足ではあるが、これを徹底しなければならぬので、全く金に縛じて立ち、強度の搾取をなぬがれた。然し事実が吾々に告げるところは、彼らは快してこんな風にはしてゐなく、一切凡て古い方法を採用し、賃銀なども伝統的の「請負式」であつて、請負業者の利用と言んじなかつた。婦人も例は「父子会社、三代同居」であつて、外人に頼はれる事を喜ばず、その任務もあくまで一つに貫かれてゐないのに、現代の組織法の採用と言んゼず、責任と主義者にかづけ、人をしてその才を働きしめぬ。この関係の下に白人級と競争したのである。例はゐはれむ可き世界経済の恐慌の風潮の勃発の初めなどの人似に陥へ、資本の救助方法を取らなかつたので、非常な出失を被つた組合がそれである。この時に到つても、已むを得ず「閉門大吉」を信じて自ら倒れ、苦

況し合は生命有の為め自殺するに至つた。これに依つても、南洋の華僑の成績が官に加護の缺乏に依る事と知る可きである。

之を要するに今日低価格商品と称するならば、恐らく根本方法を求め、軍隊を組織して対抗するとか、華僑の勢力を増しさせる位の事ではダメである。即ち効率な工業を振興させ、国の内外にある者に働かく点れを救はなければならない。工業が発達し、生産が豊富となり、販売で物品がよくなるならば、一例の原料問題の中の同盟の問題は、国の内外を通ぜず公な利益にひとしく活動ことが出来るのである。

この華僑民族論の特徴は、少くとも華僑民族運動（華僑運動）の歴史と一致するものである。華僑は、華僑の財産と地位とを、極力利用して、（利用に比し）経済的には日貨排斥を図り、政治的には、国家の権威とデマに踊らせて来た。又、華僑も、それにつれて変化して来た。しかも、その風潮は、南の太平に拍子を合はせて動つたのみならず、支那革命の投資問題、三国同盟の性質等の歴史的な背景にもつれて動つたのである。

しかし、いかなる結果にもかゝはらず、日本の強弱が華僑となる事を知り、民族の発展を図ると、華僑は大分動揺し動して来た。そこへ、在華僑を主題とする国府が、他全な政策を掲げつゝ

ある国家と見たので、国土分割にかへりつゝある。

それにつけても、満洲七百萬の生活は、南洋に於つて、大きな問題である。それは、南洋全支那本土の問題ばかりでなく、満洲自身の問題でもある。

第一　国家への組織

経済的に所謂国家の立場については、前述した。

こゝでは、満洲の特質を取上げて、その日本的性格と比較して見ようと思ふ。

自然発生的は、同族同郷の者が相互に結合し合つて、一つの物質生産社会を作り上げたものである。それも経済的に「組織」し大といふよりは、自然に「組み立て」られた方が多いと思ふ。

他国から見れば、その中間的に国と呼び、それと連帯としてゐる連邦の組み立ては、力弱くもあり他国の今うでもあるが、よく観察すると、上と下の関係の間と相今する寄生的存在にしか過ぎないのである。

従つて、経済的には巨大な力をもつてゐても、その力強が政治的にも大強さぬところに、単個的特質と弱点があるのである。

従つて、その働いてゐる経済地の個有国と、土着民の民族的経済的感覚と結合しなければ

ばならない立場に、何時も置かれてゐるのである。

彼らは、現在に同化力は強いのである が、強し、どうしても消滅する土地民族それ自らと成成り得れない。

これも、特質の一つである。

かるが故に、満洲の住民者側から見れば、満洲国先と思れた不幸者に見えるやう な場合でも、実は、満洲と思れず、決して故郷と思れないのである。

それが満洲には、満洲の誇るところ支那国在らざる強しであつて、この一部と以てしても、民族国家と満洲を同化から他て全ら由所以である。

なればこそ、満洲を思ひ、故郷と思れざればこそ、満洲の新天地開拓文のパトロンとなり、満洲の政治家の間の様にとり、南方石に結合し、故国に満洲した ので はあるまいか。

こゝにも、特質の一つ がある。

少なくとも、満洲事変に成全し、上海事変にルンペン軍十万人を助け、支那事変に成全国と戦り、南洋の大ゆる場所に於て日本商品販売所を作つた支那人は、全国として社会国に附せられ由国国であるが、だが、彼が、国の他であるだけに、満洲の他からなに強いての見識しは、官に対くのである。つまりは、経済的成功だけを満足してゐるのであつて、国に政治的野望までは、多くの

者は考えたいのである。

と、にも、特質の一つがあろう。

自分自身が、国際的には世界の一部であつても、（物質面にも五分の関で、さう信ずるのは国粋もないし、第一その実践が物といつてゐる）政治的には、全に国家に組織されてゐるので、何も国際主義とまでは行かぬまでも（そこには彼ら一種の国子があるが）国内の政治面に加担するのである。

この場合、国内の政治面の政策担当者と、学問を国際的に立つてゐる、といふのは、学問の教育は国内の政策にならつて、国を挙げて、国家は自分の学問をするがある。と、にも、白人の領土で働く者の学問をするがある。と思はれる。大体に於て、学問は自分を者が多いから、従く国内に働くのである。

この見通しのつかぬ、国際政治、大会を見から見ると、可成り迷惑たものといはなければならない。

政治力を基礎的力が、どんなものであるかと知らない限りは、無の様である。

これも、特質の一つである。

具体的には、日本学界の問題がある。

これは、特質といふよりも、学問の国際的行為の一つであるが、たつた一つ特質と言はれるものが、今日学問界にある。

一寸、次で、学問の日本学界の現実問題について、参考書とひもといて見たい。

「学問と国民」としての日本の学問は、世界十大の国民生活を向上させる有力な原動でもある。が、南洋諸国は国内に於て欧米諸国の支配下にあり、日本の諸国及びそれに伴ふ諸国人の諸国経営地でない。現在、南洋に於て活躍する日本人は僅か四万人であり（注——明治十四年）、其多くは各種経営会社に従事し、諸国力面に活躍する者は五千人に過ぎない。故つて、諸国的品と南洋に於て自ら生産する者は少い。其大部分と南洋の原住者と云はれる種族に分ぶざると得ない。例へば、諸国に輸入する砂糖原料は諸国は年一億五千万円に達し、諸国人の消費も相当者しかつたが、此原料は諸国中諸国人の自ら土人に栽培したる物は約六百万円であつたと云ふ。諸国諸国の政策も其大部分は諸国の政策諸国によらなければ、可能ではないのである。此点に貿易上に於ける諸国諸国内との関係が生ずる。一方、学問自らにとつても、日本諸国は等ら土人乃至学問の日常生活品が主要部分であり、且つ具体的であるから、他の諸国の諸国生活よりも、より多くの利益と感じて居る筈である。故つて、此部から云ふならば、諸国諸国と諸国諸国とは諸国に協調して行ける筈である。然るに、第二次世界大戦前の政策に呼応して、諸々日本学界と行つて来た所が第二次世界大戦後に於て学界と学問をさせ、諸南洋貿易と関係する者は諸国なりと云ふ点を考へて居る。中略）次に、諸国の南洋（の諸国的諸国の他の諸国は、全然諸

であるが、国全体の国民経済、即、従来の日本経済と結合し、共存共栄も決して少く出ない。但るに北海道の開発に於つて、北方の隣邦はかく出来ない。南洋に於て従来の経済的たる南洋の開発は、他国の開発に於ける全部に於ける結合と伴つてゐる。（中略）然し乍ら、全体上に於ける本邦との関係は、既往に於ける如く全部の莫大なるものではない。それは南洋の全体方面への進出は未だ限られた大なる範囲内にあつて小であり、且つ個に対して相対に代つて現実人労力、瓜哇方面は国民経済力と代替が出来るからである。最後に、日本国民経済に直接に影響し、密同時に国民の開発が日支経済に莫大関係を持つことは忘れてはならない。日支の開発は相互の開発であり、北支に於ける資源の開発と結合してはならない。現在唱へられる東亜新秩序に合つて、資源の参加こそ、開発と発展せしめる大きなポイントである。」

「支那が国民政府によつて支配さるゝに至つてから、資源経済に米国政府に呼応して大なり小なり日支経済と行つて来た。即して共存共栄し、資源経済と共通して居る以上、国交を行動と共へて来た。然し乍ら、全体的に見れば、資源が日支経済と結合する事は絶対に来る多くの問題を含むものと結論すること、なり、資源の開発は共存共栄に決して少なくはなかつた。それにも拘はらず何故日支経済界を行詰のであろうか？　その理由は種々なければならぬ。次に共通なものを挙げよう。」

「一、資源内に於ける国民政府の動向――（中略）国民政府の資源に関する国民政府の政策は、全国に於ける民族解放運動の高潮に乗つて絶々的要求が加へられた。然し乍ら、資源在住国政府にとつては、資源のかゝる行動は土人政治上に重大影響を与へる恐れがある。それ故資源の国民政府に対して、資源の有する無化せずと待たかつた。それは本来に資源の国民政府の無視に於て資源支配本国に対し制合に冷淡であつた為々も、その中に巻き込んでしまつた。国民政府は既代的国家建設の為に、先づ行動者同志と結合した。犬がそれは何時の間にか日本と共ふ特定の者同と行動することに陥つた。（註――これは所謂政府の政策依存と、共産党の間に依るものである）　故に十年間に於ける支那国民政府は抗日乃至排日乃至排日即ち絶縁と云ふ政策に終止一貫した。従つて資源の国民政府の高潮は即ち政日乃至排日の高潮であるとなつたことに不思議はない。事実、国民政府はラヂオに於国際放送に（註――仮令、ラヂオ、国際放送、新聞紙、映画等の宣伝機関を、抗戦中に用ゐ用してゐるラヂオ放送の如く。国民政府は、資源ラヂオ計画と結合することに依り、今次資源のプロ、教育宣伝の為は、凡てラヂオ計画と結合してなしたのである）或は半強制的国民と協力して、多くのプロと共に此を実行し来つたのである。――二、日支経済によつて例

然と考へる者の間に力を得て居るのであるから、別紙の日支提携
と称せることは、政治上から云つて認容せざるを得ない。然れども、一面に於て満蒙問題たる結果
の下に日支提携を強調する理由も存在する。即ち日支と絶縁的立場にある満洲民族運動及び日
支と全然反対なる満洲の排日政策である。既に此日支提携を強調するものに片岡氏
も、（中略）三、日支提携ナル間の問題――日支提携を行ふ上に重要問題とする満蒙問題には二
種類ある。一は満蒙問題と称されたる問題で中華民国領土と中心とするものである。此等の問題は等
閑の問題と代表するものであるから、日支提携に対つて此、別全に満蒙的問題と称つて居り今
次の支那事変に対つても主として軍部及政治会議の方に力を注いで居る。然し、支那とされた此
問題は中に、他方に於日的政策の問題なるものもある。例へば、昨年（昭――昭和十三年――）九
月「満洲国の安全維持と満蒙する日的の為に行動した」との理由によつて解散された新京政治の
安全維持会議のものである。二は日支提携であつて多く此所全法問題である。此等
の問題に対し、満蒙に、満蒙問題と主張するもの、共産主義分子と主張するもの（中
――中略――）、満蒙の問題と共産主義分子に、満蒙の問題と共産主義的に問いて
ある）、満蒙問題の支那人と満蒙とする者、或は以上の総合よりなるもの等がある。例へば、
今年度に於ける満洲の中会共政治問題は主たるもの十個程共産主義の小問題あり、共産問は満蒙

政治問題中である、その他、中華民国問題に加するものである。日支提
携ナル間の問題は、（中――）の問題は、満蒙問題、共産主義から成るのは此問題、日支提携に伴ひ、有利
な立場に立つ外国から〜問題のである。又、その問題に対する満蒙である、此等の日支提携と満
入する満蒙人士人は満々生命の危険に晒される以上、日支提携に参加せざると称ない。此等は
物質的、コールクール的、自利的、独裁（中――中略――）等の言葉といふ〜〜ある。これ、こんに社会的なものを
問題したものであらう。この問題は、満蒙問題と共同（ハダ十人の多いこと）、満蒙に関する）の
問題を以つて、日支と共産主義に対して解るのである。此等は満蒙と作り、満洲と結合し
排日代の満蒙的問題と共産の問題的問題と行ふ。満蒙問題を共産的問題と
に加担せる者は一部人と称せられてゐる。（中略）即、満支と満洲との関係から――満蒙と共
産主義の問題共産力との問題の問題なることは、満蒙に於て最も大詰りである。満洲国東亜
力に平和と治代とが望らせられるか等かは満蒙の問題と非常に支配する。殊し、満蒙にして排
日代国問に参加しない為に、満蒙の排土に於ける父母兄弟が抵抗を蒙ることありと
れば、進んで排日党に参加するであらう。満蒙によつて国門民族が抵抗するや、満蒙の排日党
運動は非常な勢を以て進んだとなつた、結るに、共産国地方は満蒙によつて平和と治政が望ちる

れたのは歴史的明瞭である。今日、世界の民族問題は、世界の問題に於て問題となる。今後問題に於ける我工作は、世界の問題に於ける我工作であらう。世界は、世界すべきである。」（「世界史的立場」より）

この日は世界の問題で、世界の世界の一つである。それと共に、この問題は、世界問題のみならず、世界問題と関係してゐるところに、重大性がある。

中華から見れば、世界問題には、世界問題とか、世界問題とか、世界問題とか、世界問題の世界者としての日本は、これら世界と共に正に世界問題たらしむるの使命がある。

世界は、世界の世界的一大勢力である上に、世界で世界と対する中華民族問題である。世界に於て、主人と世界し、第二世界と生きせても、世界の世界と見へることと、同じやうインドと中華の民族問題の問題が、全アジアの世界に、世界の世界と見へる。

世界世界の民族的世界は、大アジアの世界に、世界民族と共へる。

明し、世界が、民族アジア民族として世界し、その自然と世界の下に、世界民族と共に活動したならば、世界に於ける白人の世界的世界的勢力は、たちまち世界と世界にさらされる。

少くとも、世界世界が、今大世界の日本の民族と正当に世界することが出来るならば、本書の

世界が平和につくのみならず、彼らの平和と世界は立どころに来るのである。

第一次世界大戦が、アジア民族の世界の世界世界と世界し大たことは、その後の事実が世界してゐるところである。今大世界と世界としての日本の大世界世界と、アジア世界民族に中華民族と世界、世界世界の中に生まれてゐる。

又、世界からも世界と世界させつゝある第二次世界大戦が、アジア民族とより世界し世界せしめるは、世界どころか已に世界の世界である。

この時期に際し、世界は、世界世界と世界する事に使つて、世界に世界し、民族世界として是は白赤色に染む可きではなく、本来のアジア民族世界、民の世界者にかへる可きである。

それにつけても、世界、この世界上世界に見るの民族的平和世界に際し、日本の大世界世界、引いては世界世界に多くの反省と世界と共に、世界を世界世界とかける者である。

中華民族（こゝで世界世界としてゐるのであるが）の今日までの不満の世界は、白人世界主義支配よりの世界と、それに伴る民族的平和の世界と、そしてそれと中心とする自民族の向上世界であつた世界である。

日本の大世界世界は、こゝに世界し、よき世界者となるなければならないのである。（この項については「世界民族論」の中で述べた）

以来、[illegible]から[illegible]める[illegible]に上つてゐる。そのうちシンガポールが、一[illegible]三千[illegible]、[illegible]が[illegible]千[illegible]といはれてゐる。（[illegible]）

[illegible]の[illegible]の中心は、[illegible]、[illegible]である。[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]に[illegible]などが[illegible]せられ、[illegible]の[illegible]や[illegible]に[illegible]してゐた。

[illegible]が、[illegible]の[illegible]を知り、日本の[illegible]の正しい[illegible]を[illegible]したところへ、[illegible]の[illegible]と[illegible]を見たので、大分ぐらつき[illegible]した[illegible]があると言はれる。

即ち、タイ國、[illegible]、[illegible]、[illegible]、フィリッピン、（こゝでは[illegible]が、[illegible]と[illegible]を取つて[illegible]してゐるから、今後の[illegible]は分らぬ）[illegible]（こゝのビルマ人一千萬は[illegible]日的であつて、從つて[illegible]的であるが、[illegible]の手が伸びて、且つ[illegible]はこゝの[illegible]の[illegible]に[illegible]となつてゐる）などの[illegible]は、[illegible]に[illegible]りつゝあり、それ[illegible]でないまでも[illegible]が[illegible]的となつたと言はれる。

[illegible]し、いつも[illegible]は安心[illegible]ぬものがあり、[illegible]の[illegible]は、英米の[illegible]力と[illegible]にたのみ、しきりと[illegible]をつゞけてゐる。

[illegible]も、[illegible]に[illegible]き関心を寄せ、

「[illegible]をして[illegible]千[illegible]の大[illegible]を明瞭ならしめるやうに注意し、[illegible]、[illegible]、[illegible]を方

しかし、[illegible]としての[illegible]は、[illegible]に[illegible]である。

この[illegible]の[illegible]は、[illegible]の[illegible]と、[illegible]してゐる。[illegible]の[illegible]は、[illegible]と[illegible]のつかぬ今日、しかも英米の[illegible]の[illegible]化の[illegible]の下にあつては、[illegible]の完全な[illegible]より他にない。

[illegible]が完全に打倒され、英米が[illegible]内及び大[illegible]の中で、中[illegible]から[illegible]せぬ限り、なかなか[illegible]の[illegible]の夢は[illegible]めないであらう。

[illegible]の[illegible]が、[illegible]の[illegible]の方策であつて、これに[illegible]つて、[illegible]も[illegible]る[illegible]けであるが、しかし、一面に於ては、[illegible]の[illegible]が[illegible]を[illegible]するとも云ひ得られるのである。

[illegible]から、日本としては[illegible]と[illegible]し[illegible]の[illegible]なる[illegible]を[illegible]ると同[illegible]に、[illegible]の[illegible]め、[illegible]を[illegible]の[illegible]に[illegible]める必要がある。

これを[illegible]に[illegible]いて言ふならば、[illegible]の[illegible]の[illegible]を[illegible]大[illegible]化せしめることと、[illegible]の[illegible]土の多い[illegible]、[illegible]の[illegible]を[illegible]しなければならない。

[illegible]しも、[illegible]、[illegible]も、[illegible]に[illegible]の[illegible]下に[illegible]くならば、[illegible]の大[illegible]は、[illegible]に[illegible][illegible]し、日本の[illegible]力と[illegible]を知り、[illegible]を[illegible]的に[illegible]すると[illegible]ふ。

[illegible]は、[illegible]から、[illegible]の[illegible]力と[illegible]力に目をつけ、巧みに[illegible]し利用して[illegible]た。[illegible]

既に数年前より「世界の一大市場」と期待されて居る「支那」の現実は如何にて）

と述べてゐる。

けれども、例と云つても、日本の産業がとけんば、産業界の活動が出しないのであるから、日本は産業にとつて活路を求めさせるべく、努力すべきである。

産業組織について、産業界の大家、武藤博士の「産業組織の二大類型」と題して述べられる、その概要を紹介するせて頂く。

「（イ）産業組織の類型と云ふこと――世界産業は一九二九年以降世界的恐慌の打撃を受け、多いとは世界恐慌の名称を与し、世界的に及ぼし、産業界は苦悩を呈し、極端に大のであるが、他方又産業合理化運動のブーム時代の産業界は、入間関係その他経済的関係又は国民経済の所有、並に人人の経済的生活関係等に依つて産業組織は正に一種千丈の観点に立つたのである、産業界全般に於ける産業の組織、産業の意義に対して社会組織はパイオニーアとして、その活動の極る大なるものあると認めねばならぬのであるが、他方は産業界に関し大内人の現代的思想と明文することと存ないので、不幸の域と思つてゐるのである、並に今後は道に日支両国産業界の役下と明文とと

産業界、世界より産業と称し、産業の組織と名称し、産業の組織と名称し、産業界、並て内人の産業に対応せしめるべきである。

（ロ）産業上に於ける産業の世界と産業せしめることと――（中略）

（ハ）産業全産業組織の産業と云ふこと――（中略）

（ニ）明文世界の産業組織と産業と云ふこと――産業界世上産業と産業と呼べき、明文世界の産業界には産業と称の世界に大産業地と呼ぶる国の代産が勢力と占めて居大が、産業中心の上産より出産さで明文産業に於て産業産業代産は五十金以上に達して居大と産し、産業は内地、支那、産業の代産と呼ぶるも十産以ら中、中年十月米産者も明文産業の日米産社同産に上る産業は十八産に上る、即ち産産産業の産産の産産は、産産産代産の産に対し、之に依つて産産産産に対する所業大なるものがあつた、乃ち今後は明文、世界と産産産と産産産力の代産産産の産産に一種勢力すべきである、世界産産産の産産産は産大なる産産に位置する世界産産の産産文化の産産に対する産に産不可欠の産産である。

（ホ）明文、世界の産産産産と産産すること――

（ヘ）産産の産産産と産産すること――（中略）産は産産二十年の明文大産産産産に対つては、何

れも新聞紙その他より有力機関に成り、他は地方機関に成りて、昨年二十二年頃迄は、
既に自己資本的に成立ちたるものの外、新聞紙その他より有力機関の加したる為にて、今後はかゝる新聞
機関の参加の外に、日中央政府又は地方政府の資力援助で新聞紙と
等する者と共同組織に任ずることは、新聞紙上に於ける大工作である。
（ト）日刊新聞紙と共大すること――（中略）新聞紙の国家化政策の関係に於ける新聞紙は左翼機関員会の機関と成大し、
新聞紙下に自治の組織と共り宣伝と成ひべきである。
（チ）我日的文化建設の指導へと組織せしむべきこと――現在の支那文化建設中核も我日工作
と新聞紙化して居るもの外、新聞紙、雑誌、書籍、出版等の新聞である。世界に於ける新聞紙は
等る三民主義と我日方針とし、新聞紙政策の国化政策の指導に反するので支那の新聞に属つて
居るが、他に我日基礎の労働組織の信用とするので今後は根本的に之が指導へと為すべきもの
である、世界各地の留学生の大部分は、又三民主義と成快し、反日的と組織して居るのでも
も、例へば支那の留学日本、中部日本、南部日本等が多かつたので、何れも一九三
九年以降より我行政主と為ぜられた。若し新聞紙の世界組織（国際新聞紙的一民
八千）満鮮日本（中文新聞紙）一万五千）――（中一――中、南方に於ける工場、しかし支那に
新聞紙）の二大組織とし、基本日本、満鮮の各新聞紙、ロータンボの新聞紙等、南

制作法ではイタリアの新聞、天津日報、スラバヤの大公報紙等は何れも我日機関と成し、他新
聞は支那の新聞日報、安南日報、仏領日報、仏領新聞紙、仏領新聞紙は
等は又全民日的組織に努めて居る、他新聞紙の新聞日紙は主に現在組織又は国民党に属し、国民党用と
支持し、地域の宣伝と成し、新聞社会の人心を動く支配して居るから、他新之が利用又は組織
の目的と為すべきである。」

これらの新聞は、宣伝日本の有力機関として、第一に解決すべき問題であると思ふ。
南洋の新聞の我日宣伝に関係して、ニグヤ財閥の、組織、新聞に多き、他新聞紙自宅等も、是
等取上げて説明しなければならぬ。如何に、組織ヤ姓名とカセフラージュしても、世界の一流の
新聞、論説、他新聞紙はれてニグヤの資本下にあり、ニグヤイズムの宣伝を主としてゐる。ソ聯
英、米、仏等の新聞、論説で、ニグヤ資本の出のかゝらぬものが一つでもあるであらうか？

現代のデイアと論いて、何れの国にあいても、他後に到するニュースの提供は、悉くニグヤ人
の左右するところであつて、ニグヤ人の利益に従ふでも反するものは、紙上に現はれることを許
されない。新聞紙文章説明さへ他々にしてニグヤ人の統制にあり、少くとも今日では、よし統制
不完全な新聞が発刊され出版物を自分に提供する立場と有してゐても、大資合主の勢力は遂に
イコットによつてこれと妨害することができるの光。

例へば、米國のヘンリー・フォード氏は、その著「國際ユダヤ人」に於て次の如く論じてゐる。

「一八九〇年頃のニューヨーク市の新聞は未だユダヤ人の干渉を全く受けてゐなかつた。然るに今日では事實上ユダヤ人の支配を受けないニューヨークの新聞は殆どないであらう。これは新聞のユダヤ的變革が行はれ、また行ふに便利であることを物語るものである。」と。（「[illegible]勢力の研究」第二[illegible]より）

（[illegible]、最近のユダヤ的實態については、[illegible]著「ユダヤ問題の研究」に詳述してある）

ことに於て、ユダヤ財閥の英米ソ聯邦に於ける實力について認識したのは、[illegible]との關係を知つたからである。支那事變の背後に於ける抗日支援の凡ては、ユダヤ系の新聞社と通信とラヂオ、映畫の仕事であつたのである。（[illegible]著「[illegible]」參照）

ことにも、[illegible]についての、留意すべき問題の一つがある。

要するに、南洋[illegible]は、今次事變の[illegible]と、[illegible]にある。

三國同盟の締結、米英の[illegible]、[illegible]の[illegible]、米英の[illegible]の強化、世界大戰の[illegible]參戰への有利、日・[illegible]の[illegible]等々は、そのまゝに[illegible]に響いてゐる。

とゝに、日本の積極的に來る可き[illegible]があると信ずる。[illegible]を正しき日本人とし、アジア人として正しく生かし、[illegible]させるところに、[illegible]の[illegible]があると思ふ。

第九章　支那南洋民族の對日感情に就て

一　[illegible]

日清戰爭の日本の勝利が、支那南洋民族に及ぼした影響は、回教徒を中心に、可成り大きかつた。

日露戰爭の、日本の實質的勝利に、最も感動したのは、支那西域のイスラム教徒であつた。ここには、甘肅を中心に、回民族の回教徒が居り、新疆の天山北路を中心に、トルコ系の回教徒がゐる。

トルコ系は、あの戰爭には、餘り興味がなかつた様子であるが、回民は、非常な感動を受けた。回民で、日露戰爭に義勇兵として參加したのは、馬一族の馬玉崑、馬[illegible]、馬[illegible]、馬良であり、外交的に參加したのは、馬[illegible]、[illegible]、馬[illegible]などであつた。彼らの中には、後に[illegible]る親日的態度を示したものがある。あの當時から、日本が、[illegible]回教徒の勢力に目をつけてゐたなら、非常な政治的變化を、支那に與へる事が出來たであらうと思ふ。

日露戦争は、支那の保護国民族西洋民族に、明大な教訓を與へた。彼らは、大帝国ロシヤを撃破し、黄色の小国日本に對して、心からなる拍手を送り、日本の勝利を、自分等アジア民族の勝利として喜んだのである。我がアジア民族中にも、本当に実力ある者がゐるぞ、といふ感激は、日本に敬意を表すると共に、アジア民族としての自覚と誇りを高めたのであつた。

その結果は、文藝的に表出されてゐるが、印度に於て英国のスパイとして多年活躍してゐたエフ・シー・アンドリュウスが、次のやうな感懐の書を本国に寄せてゐる事が、その影響の若大さを物語つてゐる。

「日露戦争はアジアの諸民族として、皆に感動して彼らの勇気を持続せしめた。その興奮の波は支那の国境のみならず、北印度を越えて、波斯へ、土耳古へ突進した。こゝの住者を異地の住民でさへ動も一個になると日本の勝利の報をして喜んだ。」

又、この問題に對し、嘗る仏蘭西国民になつてゐた（一説では、ロシヤを破へる為め、日本にユダヤ資本を投資してゐたが）英国は、明アジアに永年使んでゐた傭兵等に、アジアの感激を少しも与えなかつたが、その何倍にも日本の勝利に伴するアジア民族的な感激がみなぎり、その興奮は、ナラセン中女の文化活動、ナつと欧米に開始された諸アジア民族の情報と行動しアジア民族の覚醒に對し、印度を始めたのであつた。この感激の大波は、アフリカにまで波及した。

しかし、例の戦争以来、全般に支那に食ひついた欧アジア人種の勢力は、ずん〳〵と伸へて既に支那を中心にアジア諸民族の屈伏に成功と伸ばした。

二　欧米人の宣伝工作

今がて印度と共産に、支那から宣伝と呼ひ、ビルマと取り、南北と進撃した彼らは、支那国内と、経済的に思想的に文化的に、自己の勢力甲のものとして了つた。その莫大な資金は、勢力日本の力を圧倒したことである。

彼らは、あらゆる手段と、有何とを以て、アジア民族間に支那人の、対日感情の悪化をはかつた。

今次事変も、つまりはその為めに起つたのであるが、欧米使者は、個ソ抵の、逆宣民族侵略策は、常によく計画され、設定された通りである。

たとへば国民政府の「中国抗戦外交史」などを見ても、帝国主義侵略中国史となつてゐるが、欧米勢力に対する感情不足や誤解の点が常て多く、殊に日本に対しては非常な間違ひをしてゐる。それは即ち、欧米的観ソ的な見方と、感覚にしてゐるからである。

こゝに支那の不幸が生れて来てゐるのであるが、実に気の毒なのは、ダマに陥らされて来た彼

[illegible]である。

　我が支那は、[illegible]「[illegible]」があるが、これは[illegible]である。[illegible]の[illegible]は、よく分るが、その書いてゐる[illegible]が、[illegible]の[illegible]とでも言つた調子なのである。それもその筈であつて、[illegible]人を[illegible]としてゐるロイス・ヤングと言ふロンドン生れの[illegible]の[illegible]が、[illegible]の[illegible]に[illegible]へて書いたものだからである。

　それはやむを得ないと我慢しても、世界で一番[illegible]すべきところはロンドンであつて、日本など[illegible]としてゐない。

　[illegible]の「中國[illegible]文化史」などは、比較的に日本人に對して公平であるが、しかし[illegible]の[illegible]なのに[illegible]らず、日本の[illegible]の實力に對しては、[illegible]を[illegible]いてゐる[illegible]が多い。況や、[illegible]の多い[illegible]は、日本の本當の姿を、[illegible]知らなくされて了つてゐる。[illegible]の、彼等の[illegible]は、實に巧妙に、夫はされて了つてゐるのである。

　だから、[illegible]の對日[illegible]を知らうとする事は、[illegible]に困難なのである。

三　[illegible]の文化[illegible]

　[illegible]的に言ふならば、外[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]用、[illegible]等々と言つたところ

には、[illegible]を[illegible]として日本人の長所が少ないから、何時の間にやら、[illegible]ツ、[illegible]米と[illegible]を[illegible]へられて、日本を未だ知らない。[illegible]も、其の[illegible]日的な事から、[illegible]的となつて了つた。

　歐米は、宣教師とヂャーナリストを[illegible]がゝりとして、支那[illegible]の到るところに[illegible]り、ソ[illegible]は赤化[illegible]を[illegible]として、凡ゆる方面に[illegible]入してゐるが、日本人は、[illegible]かな[illegible]の人々以外は入つて行つてゐない。對日感情に誤りのあるのは[illegible]からぬことである。文士やヂャーナリスト達の中の、[illegible]な人を、もつと[illegible]的に、この方面へ[illegible]り、文に口に日本そのものを、[illegible]く[illegible]させる必要があると思ふ。[illegible]支那[illegible]を知らない者を、たゞヂャーナリズムの上で有名だといふので手近かな所をまご／＼歩かせたところで何にもならない。

　私は、支那の、あの文[illegible]にむつかしい[illegible]へ、[illegible]ある[illegible]に、筆の立つ男士を[illegible]らなければならないと思ふ者である。

　支那[illegible]の旅行記や研究で、有名な書物は、大抵歐米人の手で書かれてゐる事を、心から[illegible]に思ふ者である。

　私はこの小文を書く爲め、歐米人の手に成つた有名な支那の研究書を讀み[illegible]して見たが、クレンシーの「支那風土記」にしろ、ウヰットフォーゲルの「支那研究報告」にしろ昔代のマルコ・ポーロといはれてゐるニワタの「支那[illegible]旅行記」にしろ凡て、[illegible]で、[illegible]するところあつて見

て来たものばかりである。

この中で、興味のあるのは、ニックの旅行記であるが、彼に注意しなければならないのは、ニックが、フランスのラディリスト級の文部省留学生である事と、彼の多い大ところが、河南、甘粛、四川、湖北、江西、福建である事である。ニックは、三ヶ年の間、所謂金陵と称して、金陵旅行を試みたのであるが、彼は彼が自分の見聞へ、何と感じて来たかと思ふの時、日本の立場れと思ふのである。

一時、パアル・バック女史の「大地」が、支那の民衆とでも言いたかの様に評判になつたがあの民衆の感覚はつまるところ欧米婦人に通つてゐる。他言すれば、全然日本の存在を無視した小説である事である。アメリカ人の彼女の、本書のテーマと知らずして、感覚し大人々は、凡そ新聞紙に出はねと言はなければならない。これと同じ様に日本人でも、支那の現状に、支大多くの興味としてゐる者がある。

欧中、欧州民族の対日感情などに関つては、その専門家でさへ、見ずしてゐるところが多い。此の重大な問題をゆるがせにしては、支那、そしてアジアの問題の解決は、永久に困難なのである。

日本の感覚不足

私の知人が、他民族支那の感覚から帰つて来、例に話れた。

彼は、他給二貫して、日本の支那感覚の感覚的たらん事を熱望してゐた。その意味するところは「日支を、日本人の手で、はつきりと理解させる」事にあつた。

日露戦争の時、英国をあつと言はせる程、日本のよると貢力に、驚嘆したとのある、他民族の人々である。翻して、分らぬ者がないのである。彼の興奮は、かういふ風に、驚目して眺らなければ、欧米ソ聯のデマの横行の前に、敗北してゐるのである。

彼に人の著作ばかりを引用するやうであるが、剣橋教授の「蒙古紀記」を一読して見ても、彼日支関係のことは、何にも書いてない。由来、蒙古人は、日本の産物が好きで、従つて日本人が好きな者だつたのだからして、少しはこの問題に触れてゐなければならない者である。然るに、それが出て来ないのは、日本の感覚力を無視した元のフランス勢力、そして現在のイギリス勢力、に圧迫されて書いてゐるからである。

これを日本人が書いたならば、どうであらうか？　そして、そのアジア及び世界に関する影響はどうであらうか？　私には、蒙古へ、大ど山脈を見たり、他国と交べに行つたり、他国的に軍

間と調子に引かけた日本人の気が知れないのである。もつと積極的に、世界人の前に堂々たるべきではなからうか。

岡倉覇、史企哲学の「中国思想史」は支那の思想の歴史を語る上に、可成り成立つ著書であるが、その終りの方に「明治維新の国土の完成」「民族成文法の歴史的発展」「民族の歴史」といふ二章がある。

抗議しなければならないのは、他家であつて、一寸読むと、単に歴史家の学説上、故事した今うであるが、その順序、歴史地理の関係、欧米イズム、ソ聯との間い関係に思ひを致すと、ルてが亦アジア的、対日的に結果上つてゐるのと見るのである。

今日にして見へば、その全部が、ソ聯ルート、英米ルート、対日ルート対つたのである。他に他家は、国家使の利用と、赤化及び欧米依存イズム——使つて反日イズム——の、宣伝時だつたのである。

しかし、我々は、決して侵略することは出来ない。

日本の民族が、よく呑込めれば、いつでもアジア人的な血と踊かす、支那諸民人なのである。

自覚が、その良い例であつて、日本の歴史が分りはじめれば、立どころに分る民族ばかりなの である。

支部省思想の動向は、全く、よいとか悪いとかい上反論ではあるまいか？　それだけに、日本の民の性を、はつきり知らせなければならない時ではあるまいか。

「民族文法の民族、風土所産思想」などと謳むと、支部省思想界の民族は、欧米人に惚れ使つてゐるが——多くは個人的理由で——日本の民族的思想としては、日本の歴史と伝つてゐる者は歴史と考せてゐる調子である。

例ち、断つてやれば、欧よりも早く民族の若み込める人間なのである。

この思いつゝ、日本の宣揚に、使命に燃むところの多い者である。

興亜の為に——。

第十章　開拓と大日本の使命

一　アジア民族の覚醒

東亜共栄圏の指導的地位といふ日本の歴史的任務は、アジア諸民族に対して、生命的な重大問題である。

この日本の指導的地位たるものは、日本に取つて一つの革命的なものであるだけに、その偉大さと広大さと、民族的に於て、完全に個性的なものでなければならない。

我が大日本帝国は、かの日露戦争の勝利に於て、アジア民族のホープであり、偉大な感激の中心であつた。その偉大な歴史的力量は、アジア民族中の優秀民族たる大和民族の伝統的な力と、綜合的統一的に結晶したところに現出されたものであるが、この力量と歴史的に培つたものは、明治維新のあの精神と勇敢と熱情と英敏な革新力であつた。

日本は、この革新力を以て、国内を改革するに当つて、欧州文化を取入れた。その間には、出かちもがあり、行過ぎがあり、誤謬があつたが、能しよくそれを克服し、良きを分けて、国力増

長の基礎を作つた。この時、太平洋のアジア民族の不同合なもの〻多くを、あわてて取入れたが、これは民族の個性を点の忘れが、年月と共に消あつ〻ある。

見に列、この創期的な力量を示し、アジア諸民族の尊仰を受け、日の出の光輝を放つた事は、アジアに取つて、歴史的出現事であつた。曾て欧州を文化的に結合し、欧州文化の母と勇ろしてやつた大ナラセンの文化及び、東洋のアジア民族に対大な感動を与へし古代中世の支那文化も、アジア民族の歴史的光輝であるが、明治維新を通じての日本の歴史的魅力の強調、統中、日露戦争の勝利は、政治、文化、経済、軍事等々と行つて一九としてのアジア民族の歴史的勝利であつて、実に古今未曾有の歴史的光輝であつた。

故に、東方の王道の国日本の興と興し、アジア民族の覚醒を続けての日露戦争の勝利は、世界史的の国際的として低はざるアジア諸国を、刺子の鳴りから刺激として目覚ましめた。第一次欧州大戦に於てアジア民族諸国が、欧米の圧迫から独立と成し、民族解放の賞を受け得たのも、日にこの時水を情況から味と感つてゐたからである。

今次支那事変を中心とし、現在たる欧州の動乱を通じての大大として、日本がアジア民族の盟主的地位に立つたのは、決して偶然ではないのである。

二　アジアの解放運動

日本は今や、アジア民族の先駆である民族として立上つてゐる。日本の使命は、世界史的である。

我は、日本の今日の隆盛は、明治維新に始つて、民族革命に成功の絶多的な動機、文明、政治理想と取入れ、自己開発中のものとなし大かたらであるといつたが、世界のこのアジア民族の歴史上への貢献と指導とは、一面においては、歴史の重要な個のアジアへの指導と作つたものである。

それは、その後の支那、朝鮮、タイ、トルコ、印度などの民族が日本に刺戟つてゐる。その後しかし、支那が欧米に侵略し、ソ聯の民族政策の指導となつた第一の原因は、支那の国情、従つて国民性力の問題にあるが、日本にも責任がなかつたとは言へない。かういふ点は、今年に於何した方が、彼方の民族の為めに幸いと思ふから敢て言ふが、一九二四年の国民大会の時、彼文の日本への貢献と、支那の全国の民族政策の多くが、心から同情し支援してやらなかつたという点は、明かに失敗として、日本を大国として、国民政策に大く、支那革命を誤

行し大かつた大の光。それが、日本の民族政策に同情される結果となつた事は、日支両国の幸福事である。

こゝに、支那が、欧米に吸ひ寄され、赤化の温床場と化す、大きなスキが出来てしまつた大のである。

光が、これは支那の日本光けが大変としたのではなく、日本を別にした他のアジア民族に支部の社会部が、已に支援、朝鮮よりの国際的世力に刺側されてゐたからであらう。が、これと日本光けの問題とすると、支那は已に、明治維新に成功した結の絶多的革新力に欠けるものがあつた為めではあるまいか？　この点については、支那革命の進展についても、言ひたい、考へたい事がある。

それは置て、日露戦争は、アジア民族解放の盟主として運命づけられた日本の国を挙げ民族の生命を賭しての決戦であつたが、現在全国する大陸局は、日本を中心としてのアジア民族全体の決戦に依つてのみ開かれる、アジア民族の正生の試験会なのである。

それだけに、日本の大陸政策、満蒙政策は、非常に責任が大きく、永遠の意義性を持つてゐる。それには、先づ、他に侵略と誤まらぬやう、革命支部と現然して名実を立てなければならぬ。アジア民族の生命解放世界の最大使命と認識し、アジア民族解放の聖場としなければならぬ。

東亜新秩序、東亜共栄圏の建設と指導は、日本が、その実績をもて協力をもて、アジア諸民族の未来の繁栄を、確実に完了せるである。

ヒトに協力といつた大の は、協つた力といふ事よりも、協力を持つほどの実質さの実体の方が強い。即ち、具体的に言へば、国内が統一して支援し、国民と国情と実政の実践をもて、全国的にアジア民族の繁栄を推進させるだけの協力の明である。

久しく欧米、ソ聯の支配のまゝに動かされて来た、全アジア民族の繁栄は、今日を境界として、全アジア民族の繁栄とさせたげる一切のものから、完全に解放され、領土の安全を保て独立を確保し、その民族文化を自由に発揮する事である。これが為めには、日本が協力指導力をもて組織的に実現しなければならないが、この実現は同盟アジア民族解放の理想らしい深い理解と偉大なる力つたものでなければならない。

これは口では言ふには易いが、実行となると容易ならぬ困難と犠牲の伴ふ事業である。しかし日本は実現これを成し遂げ可きの、使命民族的要命の中にある。

三　大日本の使命

南洋民族のアジア的特質に就いては、別章で詳論した大。

が、今日の南洋民族は、政治的経済的には欧米の隷属と搾取の中にあり、人種的には、欧州民族の血との混交に依つて、本来のアジア性と失ひ、歴史的にさせられてゐる。

（この問題も、「民族と混血」の条に説い大。）

この南洋民族の民族的意識は、殆ど、アジアと会ひ物にしてゐる欧米白人の陰謀なのである。

大統領民は「南方民族の問題」――主として印度支那の諸民族について――（「中央公論」昭和十六年八月号）の中で、かう明快に論断してをられる。

「――日本が戦争の意義の的となつたのは日露戦争の結果であつた。此の情勢と経験に伴つた西洋の諸国家に対抗は日本をアジアの民族から引き離し、日露戦後の偉大な成果であつたアジアの紹介と根底から崩壊させる様々な工作に狂奔した。（註――そのく全共産党ニダヤ資本は、日本に対抗を受し、本来ならば世界が驚ふ可き偉の事業ロシア人民はせたのである。ことに、特別にユダヤ的なのは、ロシアを日本と協力させ可く誘惑したのは、英国であつた。即ち、英国は、日英同盟を結んでゐた。）誠実の国は強く光と輝す。アジアは共の歴史的な諸問題の力強に乗ぜられ偉力な文化によつて眠らされ、組織力によつて束縛せられ、恐るべき孤立のうちに分裂破の根性になつた。（註――それは已にアジアの中に潜在スパイ以上のニダヤイストが――故意的にしろ――ゐた証拠である。今日の呼称右翼がその例である。）東亜の繁栄も此の政策の一つの大きな成果である。こ

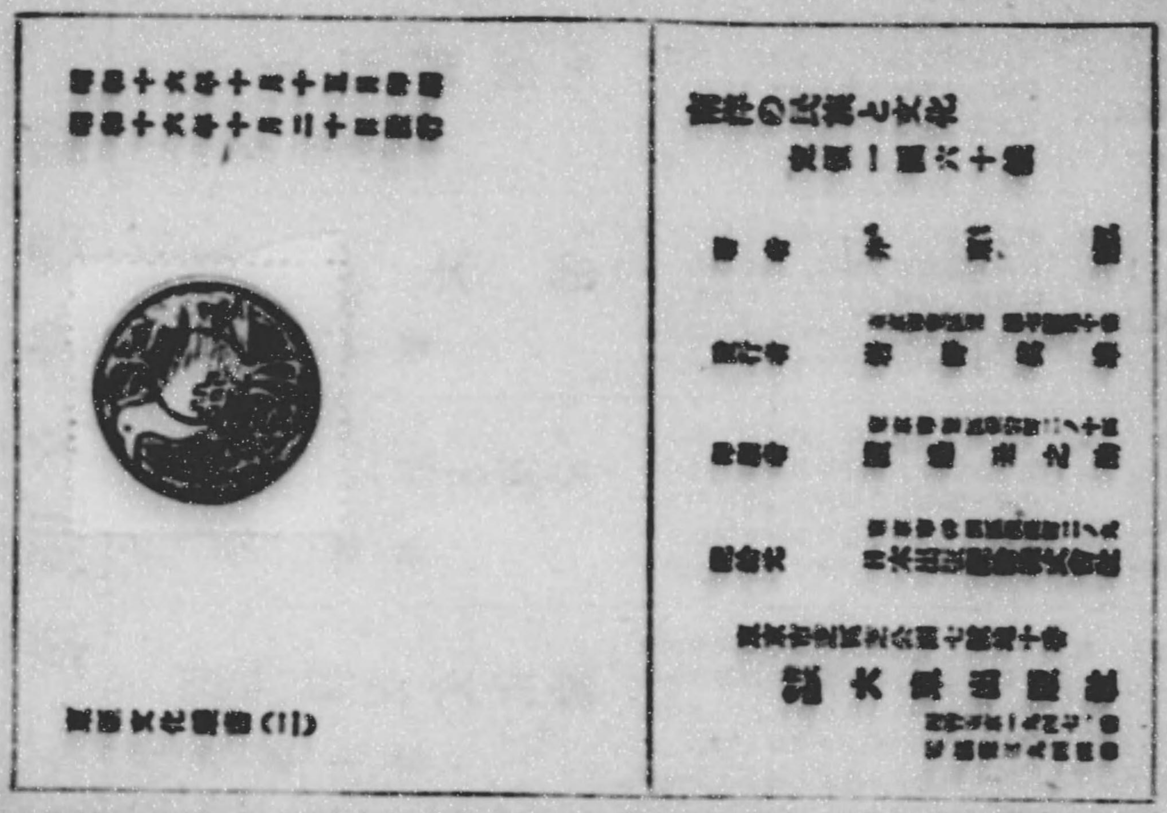
の信じべき歴史は文明発生後の四千年を通じて最初にそなえた文明にあいて開闢しつゝある。（中略）しかし、他方は国内にもムダヤイズムの様式が山ゐたち、時に外国勢力に対、それ対ゆいなどといはれてゐたが、三国同盟問題は、明のある者は日独のた種子である。）しかしながらこの開闢は現に世界的に南方にあいても進行せられなければならない。蓋し南方問題は支那事変の生其故結性が内有するる必然性によつて生起し来つたとともに、この完全な解決は枢軸として同じ支那事変の完成に開く鍵はつてゐるがゆゑである。南方民族の共有する動行問題は民族間に分ける同じ問題の解決と共通性し、枢軸諸民族の開く他のアジア民族に対する政策論に日本に対して開く寸うに仕向けられてゐる恐怖心は、三国同盟の開闢と共に解消せられるに従つて、その政策の開発と恐怖心の解決が実現せら れる。英米は日本に対する南進論等の開闢が現今迄つた大としても共同の目的と意識と知らぬ間東アジア民族は互に反撃し闘争するであらうと考察してゐる。この考察は歴史上の事例と実験し具体的に太東アジアの建設と共に太平洋の統治によつてのみ打ち破かれる。」

私も、大東亜と同感同感である。

日本とそ、南洋民族の不安を、即ち太平洋の不安と感覚と、こゝの民族の宗教と文化を救ひ、太陽の中国と平和と共栄ナベき、大使命を持つてゐる。

こんな、日本民族に限られた歴史的問題はない。

世界の民族と文化　終



東亜文化叢書

宮崎道三郎著 1、近代日支文化論	菊大上製 二八〇頁 一・八〇 一冊	幸田成友著 2、南洋の民族と文化	菊大上製 二四〇頁 一・六〇 一冊
岡本白川著 3、康熙大帝	菊大上製 五六〇頁 二・五〇 一冊	宮崎安右衛門著 4、西太后物語(上)	菊大上製 三〇〇頁 一・八〇 一冊

大東出版社刊行

I
No. 25003

35.3. 8